

文字の分類案

— 一般文字学の構築を目指して — *

福盛 貴弘(筑波大学大学院)・池田 潤(筑波大学)

キーワード：文字学、文字の分類、〇〇式、〇〇型、〇〇系

1 序

文字は音声と並ぶ言語記号ではあるが、文字の研究は音声の研究に比べて大幅に立ち遅れている。言語学の入門書を見ても、音声に関してはページが割いてあるのに対し、文字は無視されるか、補足程度の解説しかない場合がほとんどである。その理由は言語学がアルファベット文化圏で成立したために、文字は音声を書き写すものに過ぎないという先入観が根強いからだと思われる。しかし、その先入観が誤りであることは、文字の特徴を捉え直せば明らかである。例えば、河野他(2001)『世界文字辞典』に示された様々な文字の紹介を概観すると、文字は単に音声を書き写したのではなく、まずは語を語として記し、後に表音性を伴うようになるといった通時的変遷の例がみられる。これは、音と文字との相関性はあるものの、形式としてはそれぞれ独立した特徴があることを示すものである。この点は、個別の文字に関する説明を巨視的に追ってだけでも、十分に窺知される点である。

ただし、文字の説明に関して、セム系文字の基準や漢字圏の六書の基準などが混在しており、項目間に統一観がみられない点が気になった。これは、文字に関する一般則がまだ定着していない、別の言い方をすれば一般

*本稿は、2001～2002年度に筑波大学人文社会科学研究科で開講された「文献言語学研究」での議論、および対音対訳資料研究会(2001.9、福盛、於富山大学)、一般言語学例会(2002.1、池田・福盛、於筑波大学)での口頭発表をふまえて文字化したものである。諸先生方や学生諸氏から様々なご教示をいただいたことに対し、この場をかりてお礼申し上げる。

文字学的基準がないからだと考えた。そこで、一般文字学の構築を目指しつつ、本稿ではその中で特に文字の分類に関する一般則を提唱することを主たる目的とする。

さて、分類案を示すに先立って、いくつかの前提条件を確認しておきたい。まずは、学問領域である。文字学・文字論に関しては、先行研究に以下のような記述がある。

河野六郎(1977):文字の研究、とりわけ文字の言語的機能を扱う文字論ともいべき領域が、当然言語学の中にあってしかるべきであるが、現在のところ、いまだ十分に理論構成がなされていないため、その分野の研究は今後の発展に期待しなければならない。もとより、それぞれの文字の字形についての考察はなされて来ている。中国などでは『説文』以来、文字学の伝統がある。しかし、ここで問題にしているのはそういう外形的なことではなく、そもそも文字とはどういう言語的機能を持つ言語記号であるか、を研究することである。(p. 4)

西田龍雄(1986):文字を対象とする言語学の分野は、「文字学」と呼ばれる。英語では“grammatology”という。(p. 220) 文字学の最も中心的な領域が、それらの研究の基本にある文字の組織自体にあることはいうまでもない。それは、後述する「字素論」、「統字論」、「形字論」を中核とするだけでなく、あらゆる文字の性格付けに適用できる類型論的基準の設定も含まなければならない。(p. 222)

筆者らは、文字学は音声学と同様に独立科学として存在すべきだと考える。その意味では、西田(1986)よりも河野(1977)を基本的な立場とした。また、音声学と音韻論との関係に則して、文字学と文字論という関係を設定し、文字学では主に文字の形式・形状を扱い¹、文字論は言語学の一分野として文字の言語的機能(例えば、ある言語とある文字との対応を

¹文字学は、文字の形式以外にも扱うべき領域がある。音声学における調音音声学・音響音声学・聴覚音声学に則して考えるなら、筆記用具や文字を記す際の生理文字学などの産出に関わる領域、文字が書かれる媒体(紙・粘土・石など)や文字の筆跡鑑定や伝達経路などの伝播に関わる領域、文字を視覚や触覚で知覚する場合や脳内で認知処理する際の生理文字学などの知覚・認知に関わる領域などを設定することも可能であろう。また、

ふまえた表音・表音素・表形態素・表語機能など)を扱うという区分を設けたい。

次に、文字の分類案を示すにあたり、前提条件となる文字の単位について述べる。文字の単位に関しては、「字素・字節・字句」という用語を用いることにする。字節は、形状として1まとまりをなしているものをさす。字素²は、字節の構成要素であり、漢字の部首やかなにおける濁点などがこれに該当する。字句は、複数(単数以上)の字節で構成される文字列を1まとまりとしてとらえる場合を指す³。これらは、3節で改めて詳しく説明していくが、本稿での分類呼称は形式において1単位に相当する字節に対して与えるものだという点を先にことわっておく。

これらをふまえて、文字学的立場から字節に対する文字の分類のための呼称、また、「その呼称を見れば、その文字の特徴が分かる」分類案を提唱する。それは、西田(1986:222)にも指摘されているように、「あらゆる文字の性格付けに適用できる類型論的基準の設定」を目指している。そこで、これまでの表意文字・表語文字・表音文字という用語の問題点や質的差異の指摘、類型や系統に関して論述した後、分類のための呼称、およびその呼称を適用した具体例を示すことにする。

2 文字の呼称における考察

ここでは、筆者らが知る範囲での文字の呼称に関する問題点と新たな呼称の提案を列記していく。

2.1 ○○式○○文字

2.1.1 ラテン文字

ラテン文字が使用されている地域・言語が広域に渡ることは、いまさらながらいうまでもない。ただし、文字の範型は同一であっても、そっくり

西田(1981)で述べられるところの対照文字学や比較文字学などへの応用も想定できよう。

²文字の形状の違いを捨象して概念的に用いられる文字素とは異なる。

³字節が paradigmatic な視点、字句が syntagmatic な視点によるものともとらえられるが、実際には paradigmatic か syntagmatic かというのは相対差であり、一義的に述べることはできない。ただ、本稿での分類呼称は、syntagmatic な視点も視野には入れてはいるものの、原則的に字節という paradigmatic な視点による離散的単位に対して与えている。

そのまま原形をとどめているわけではなく、多少の変形を施したり、文字に対する音価は言語によって異なったりする。例えば、「ç」という文字は、「c」という文字の下にフランス語式に言えばセディーユをつけることで一種の変形を施した1文字となっている。また、「ç」に対する音価として、フランス語なら [s]、トルコ語なら [tʃ] となる⁴。こういった点から、同じ形状の文字であっても、それぞれの言語における適用の仕方が異なることをふまえる必要がある。そこで、ここでは第一段階として、「フランス語式ラテン文字」「トルコ語式ラテン文字」という呼称と、「フランス文字」「トルコ文字」という呼称を提案しておく。

2.1.2 蒙古文字

さて、2.1.1. で述べた後者、すなわち「フランス文字」や「トルコ文字」に相当する呼称として「蒙古文字」があげられる。これは、モンゴル語(あるいは蒙古語)を表記するための文字の呼称である。代表的なものに、「ウイグル式蒙古文字」「キリル式蒙古文字」があげられる。これらは伝統的なモンゴル語学での用語で、前者はウイグル文字を、後者はキリル文字を範型とし、モンゴル語の表記のためにアレンジを加えており、「アレンジを加えることで、モンゴル固有の文字となった」という意味合いが込められていると考えられる。この立場に照らして、先程のラテン文字の呼称を考えるなら、「ラテン式フランス文字」「ラテン式トルコ文字」という呼称が得られる。

2.1.3 両者の相違点

ここで、「トルコ語式ラテン文字」と「ラテン式トルコ文字」という両者の呼称における基盤の違いを示す。前者は、「トルコ語に適用できるようにアレンジしたラテン文字」という立場であり、後者は「ラテン文字を範型とし、アレンジを加えたトルコ語固有の文字」という立場だと想定できる。これら両者の立場は立脚基盤の違いであって、一概にどちらが正しいといえるものではない。しかし、筆者らの直感的な語感として「〇〇式」は前者の立場、すなわち、「ある言語に適用できるように(あるいは表記できるように)」の方が自然である。そこで、ここでは「〇〇式」は「〇〇

⁴ラテン文字の西洋諸語での音価に関する詳細は、河野他(2001:1086-1102)参照。

語に適用した」という意味で用いることを提案したい。従って、本稿の立場では、「トルコ語式ラテン文字」「フランス語式ラテン文字」「モンゴル語式ウイグル文字」という呼称をとることになる。なお、「〇〇文字」に関しては、2.3. で後述する。

2.2 日本文字

次に1つの言語で複数の文字体系を使用している日本語を例に検討していきたい。2.1. 節で述べた観点から、仮に「日本文字」という呼称を想定した場合、

(a) 日本固有の文字

(b) 日本語を表記するための文字

という2つの解釈が生じる。具体的には、(a) ならば「ひらがな、カタカナ、国字(峠、働など)」、(b) ならば「漢字、ひらがな、カタカナ、ラテン文字(ローマ字)」などが代表的にあげられる。

全ての言語が独立して固有の文字範型をもっているわけではなく、多くの言語で何らかの文字範型を借用したり変形したりすることで、文字体系は得られるものである。この点から考えると、(a) の立場を一般則とすると適用範囲が狭められる感がある。また、「アレンジすることで固有となった」という立場を推し進めるのは分からなくはないが、結局のところ、文字をもつ言語ごとに異なった呼称を生むだけである。こういった点から、(b) の観点の方が、一般則としやすいと考えられる。

ただし、(b) の立場をとっても、複数の文字体系が同時代に混在している以上、「日本文字」という単一の文字は存在しない。具体例であげた文字も、「日本語式」にアレンジされていることはいうまでもない。これらを総合して、(b) で具体的にあげた文字の前に「日本語式」とつける方が、一般則としてふさわしいと判断した。

2.3 〇〇文字/〇〇字

日本語での文字の呼称に関して、以下の3種の呼称がある⁵。

⁵ 「パスバ文字」「パスバ字」といったような同一の文字に対する呼称の違いや、「パスバ文字」か「バクバ文字」かといった言語学か歴史学かという学問的基盤の違いによる呼

- (A) ○○文字 … ラテン文字、楔形文字⁶など
 (B) ○○字 … 漢字、ローマ字など
 (C) 何もつけない … ひらがな、カタカナ、ハングルなど

本稿では、文字の全体像と形状との呼称を区別することを提案する。「○○文字」は文字の全体像を示すという立場からの共通の呼称としていきたいと考える。一方、形状に関しては、日本語での言い方として、「ラテン文字」を「ラテン系」とし、その他も同様に「漢字系」「ひらがな系」「ハングル系」という呼称、またそれをふまえた「ラテン系文字」「漢字系文字」「ひらがな系文字」「ハングル系文字」といった呼称⁷を提唱したい。

3 文字の類型

本稿では「その呼称を見れば、その文字の特徴が分かる」分類を目指している。そのためには、これまで述べてきた分類に加え、文字が表記する言語的要素による類型（以下、単に類型とする）を呼称に含める必要がある。文字の類型と言えば、表意文字 (ideogram)、音節文字 (syllabogram)、アルファベット (alphabet) の三分法が有名である⁸。この分類にしたがうと、漢字は表意文字、かなは音節文字、ローマ字はアルファベットとなるが、この三分法にはさまざまな問題点がある。

3.1 「表意文字」の問題点

I. Gelb が指摘したように、いわゆる表意文字が表すのは非言語的な「意」ではなく、ある言語の「語」である。ゲルブはアメリカ先住民の絵文字と

称の違いに関しては、本稿では不問とする。

⁶ 楔形文字には広義と狭義があり、前者はシュメール系の楔形文字、ウガリトの楔形アルファベット、古代ペルシア楔形文字を含む。これらは（感化の関係はあるものの）字形の面でも表記する言語的要素の類型においても別個の文字体系と言える。そのうち、シュメール系楔形文字が狭義の楔形文字である。ウガリト楔形アルファベットと古代ペルシア楔形文字がそれぞれウガリト語と古代ペルシア語専用だったのに対し、シュメール系楔形文字はシュメール語のほか、アッカド語、エラム語、ヒッタイト語、フリ語、ウラルトゥ語等の表記に用いられた。本稿では「楔形文字」は広義で用い、シュメール系楔形文字、ウガリトの楔形アルファベット、古代ペルシア楔形文字についてはそれぞれ「シュメール文字」「ウガリト文字」「古代ペルシア文字」と呼ぶことにする。

⁷ 慣習的な用語から考えると不自然ではあることは承知している。また、「系」を「形」としなかった点に関しては、4 節に記す。

⁸ Daniels and Bright (1996:6)

ウルクスの原楔形文字を比べて、複数の物品をその数だけ物品の絵を描いて示す前者の文字は表意文字と呼べるかもしれないが、数を示す記号と物品の絵を記す后者の文字は表語文字 (logogram) と呼ぶべきだと主張した⁹。この主張は広く受け入れられ、以後、シュメール文字や漢字が表意文字と呼ばれることは少なくなった。さらに G. Sampson は表意文字という用語を完全に避けて、文字を次のように分類する¹⁰。

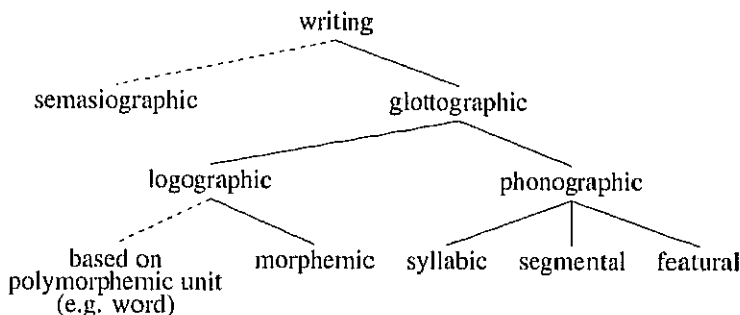


図1: Sampson の分類

semasiographic systems は「観念を直接に示す視覚伝達システム」と定義され、「話し言葉を視覚的に提示する」glottographic systems と対比される¹¹。図1で semasiographic と writing が破線で結ばれていることから分かるように、semasiographic systems はそもそも文字 (writing) がどうかすら定かではない存在である。

表語文字を独立の類型としてたてない研究者もいる。たとえば、J. DeFrancis は純粋に表語的な文字体系は存在しないと主張する。DeFrancis (1989:56ff) によると、すべての文字体系はかならず何らかの表音機能を持ち、表音文字の一部を表語的に援用する文字体系 (morpho... systems) と

⁹ Gelb (1963:65ff)。表意文字の記号内容が概念であるのに対し、表語文字の記号内容はそれ自体が記号表現 (音素列) と記号内容 (概念) をもつ言語記号である。

¹⁰ Sampson が「ideographic」という用語を拒否する理由については、Sampson (1985:34) 参照。

¹¹ Sampson (1985:29) は semasiographic systems を「systems of visible communication ... which indicate ideas directly, in contrast to glottographic systems which provide visible representations of spoken-language utterances」と定義する。

そうでないもの (“pure” ... systems) とに下位区分できるという。

分類	下位分類	例
syllabic systems	“pure” syllabic systems	Linear B, Kana, Cherokee, Yi
	morphosyllabic systems	Chinese, Mayan
consonantal systems	“pure” consonantal systems	Phoenician, Hebrew, Arabic
	morphoconsonantal systems	Egyptian
alphabetic systems	“pure” phonemic systems	Greek, Latin, Finnish
	morphophonemic systems	English, French, Korean ¹²

図 2: J. DeFrancis の分類

また、R. Sproat は「すべての文字体系はおそらくある程度の表語性を有する」¹³と考へ、表音文字の各類型に何段階かの表語性をみとめている。その結果、彼の分類案は表音的類型と表語性の度合いによる二次元的マトリクスをなす¹⁴。

この分類は非常に魅力的であるが、Sproat 自身も認めるように、表語性の度合いの評価は「トリッキー」で、図 3 における位置づけは印象の域を出ない¹⁵。程度差（注 12 参照）を客観的に量る尺度を定めるまでは図 3

¹²河野 (1977:1-22) で英語の *night* と *knight* の書き分けや、発音上区別のない *aime* と *aiment* を書き分けるフランス語の正書法、実際の発音のいかに問わず、語幹と接辞をはっきり書き分けるハンゲルの綴字法に表語機能を見出している。ただし、この表語機能は字節に対してのものか字句に対してのものが区別されていない。例えば、ハンゲルもラテン文字も主に複数の字節で語を記す。すなわち、字句に表語性が対応する。その表語性に対する表音性を考えると、以下ようになる。1 字節で単音や音節をあらわす場合が最も表音性が高く、ハンゲルが最も表音性が高く、英語やフランス語は低いと考えられる。英語やフランス語の表音性は字句に対応し、字節はそれを補助するととらえることもできる。この問題の詳細は別途に改めて記すことにするが、ここでは表語性にせよ表音性にせよ程度差があるということを指摘しておきたい。

¹³“... all writing systems probably have some degree of logography.” Sproat (2000:142)。ちなみに、河野 (1977:18) も同様の指摘をしている。「実は、表音文字の場合でも、表語は依然として文字の根本的機能をなしているのである。」

¹⁴Sproat (2000:142) 参照。

¹⁵例えば、河野 (1977:19) も指摘するようにハンゲルの綴字法は形態音素論的であるた

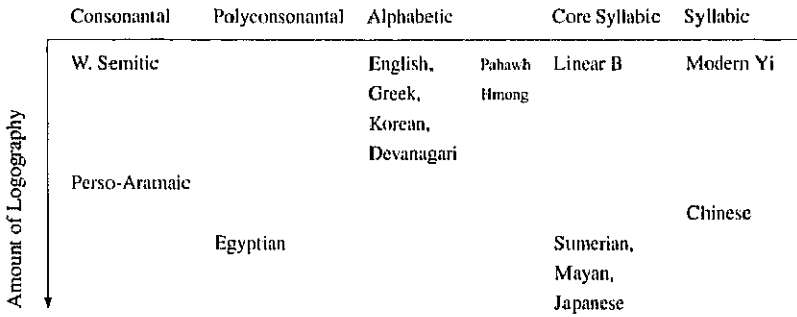


図 3: R. Sproat の分類

のような分類は避けるべきであろう。そこで、本稿では「すべての文字体系はおそらくある程度の表語性を有する」という考えを受け入れつつ、表語性の度合いの評価は保留し、表音と表語の間の主従関係だけを分類に組み込むことにする。すなわち、「音節」「子音」「単音」という表音文字の類型と「表語」を並列し、文字数および使用頻度の面で主となる方を前に出すことにする。たとえば、かなは音節表語型、日本語の漢字は表語音節型となる。これらが厳密な分類となるが、本稿では「すべての文字体系はおそらくある程度の表語性を有する」という前提に立つため、(主ではなく)従の「表語」は省略しても問題はない。したがって、単に音節型という場合、それは音節表語型を指すものとする。

表語文字に関しては、もうひとつ論じておくべき問題がある。表語文字の中には、表語文字とは別に表音専用の文字をもつタイプと、表音専用の文字をもたずに表語文字によって表音をおこなうタイプとがある。たとえば、古代ペルシア文字は前者のタイプに属し、アッカド文字は後者の代表例と言える。「その呼称を見れば、その文字の特徴が分かる」分類案を提唱する以上、本稿の提案する分類にはもこの違いも盛り込んでおきたい。そこで、表語文字とは別に表音専用の文字をもつ場合は両者の併用とみなし、両者の間を「・」で区切ることにする(3.4参照)。

め、図3におけるハンゲルの位置づけには再考の余地がある。

3.2 「音節文字」の問題点

一般に音節文字と呼ばれる文字体系の中には、厳密に言うとは音節以外の要素を表記するものがある。日本語のかながよい例であろう。「ほんとう」「いっぱい」等において、「ん」「う」「っ」は明らかに音節を表記していない。したがって、かなはモーラ文字であるとも考えられる¹⁶。

これに付随して、漢字の類型を見直す必要が生じる。J. DeFrancis は中国語を念頭において漢字を表語音節文字に分類している(図2参照)が、この分類は日本語の漢字には当てはまるだろうか。たとえば、田 /ta/ /da/ は音節を表記していると言えなくもないが、池 /ike/ は少なくとも1音節には対応しない。この問題には次の2つの解釈が考えられる。

- (1) /ike/ を2音節とみなして、日本語の漢字を1つ以上の音節を表記する音節文字と分類する。
- (2) /ike/ を2モーラとみなして、日本語の漢字を1つ以上のモーラを表記するモーラ文字と分類する。

まず、1文字で複数の言語的単位を表記するケースはほかにも散見されるため¹⁷、音節文字ないしモーラ文字が1つ以上の音節ないし1つ以上の音節モーラを表記する可能性を想定することには何の問題もない。また、漢字には「ん」「っ」のように1音節を形成しないモーラ相当の単位を書き表す文字がないため、どちらの解釈も理論的には可能と言える。(1)には漢字を一貫して音節文字と分類できるという利点があるものの、日本語を漢字かな混じりで表記する際に一方が音節を表記し、もう一方がモーラを表記すると考えるのは不自然なので、日本語の漢字はモーラ文字とみなすこともできる。同じ文字であっても表記する言語によって類型が異なる場合も出てくるのである。

この問題に関しては、ブラーフミー文字からも検討しておきたい。ブラーフミー文字は、1字節が1開音節に対応する。従って、開音節言語を記す場合には、音節文字として差し支えない。しかし、A. Gabain によって

¹⁶ Sproat (2000:139) にも同様の指摘がある。

¹⁷ エジプト文字には単子音のほかにも2子音、3子音を表記する文字が存在する。アッカド文字にも方言によっては CVCV タイプ、VCV タイプがある (V は母音、C は子音を示す)。河野他 (2001:151ff, 34) 参照。

解読された古トルコ語表記のためのブラーフミー文字¹⁸の場合、そうはいかない。トルコ諸語は、開音節も閉音節も有する。従って、開音節文字だけでは記述に支障をきたす。そこで、例えば/CVC.CVC/といった音韻構造をもつ語に対しては、CV.CCV-Cといった文字構造で記されている¹⁹。語頭のCVはそのままの文字を用い、語頭のCVCにおける末尾のCは次の文字のCVの頭につけた形状の文字を用いる。また、語末のCは前の文字と横線で結びつけて示される。すなわち、-Cという字素はCCVにつくことで共に1字節をなす形状となっている。従って、2音節・2字節であるが、それぞれは1対1対応していない。CVCの末尾のCに関しては、語中(CCV)では語の統合機能²⁰として次の文字と合体し、語末(-C)では境界表示機能²¹として属する音節の文字と合体している。厳密に音節とは一致しないものの、音節に準ずるという意味で「準音節文字」という分類が考えられる。

文字には文字の体系があり、字節=音節である必然性はどこにもない²²。日本語のかなにおいても、「あ」「か」は音節にもモーラにも相当し、「ん」「っ」は音節に相当しないがモーラに相当し、「ゃ・ゅ・ょ」はモーラにも音節にも相当しない。いずれも1字節をなしているが、「ゃ・ゅ・ょ」はウイグル語をブラーフミー文字で表記する際の「-C」に近いと考えられる。こういった点から、日本語における「モーラ文字」、ウイグル語表記のブラーフミー文字における「準音節文字」という呼称は、「音節文字」の下位分類として別途に検討すべきである²³。従って、ここではひとまず広義の「音節文字」という呼称をそのまま用いておきたいと考える²⁴。

¹⁸ Gabain (1954, 1974) 参照。

¹⁹ 福盛 (近刊予定) で /qutluγ / (幸) が、qu と tlu-γ という字節に分かれるという解説例を示している。(音節は, qut と luγ。)

²⁰ アラビア文字やウイグル式蒙古文字の語中形なども統合 (あるいは連結) 機能を有する。

²¹ アラビア文字やウイグル式蒙古文字の語頭形や語末形、英語やフランス語の分ち書きなども境界表示機能を有する。

²² 例えば「音素」を設定する際、音声から出発する記述音韻論と、文字から出発する文献音韻論とは作業仮説は異なる。最終的に双方で導き出した「音素」が一致することが目指されるところであるが、そこに到達するまでの中間的過程においては相容れない部分があつてしかるべきだと考えられる。

²³ 文字学の範疇というより、むしろ文字論的表音機能として検討すべきものである。

²⁴ 音節文字に関しては、形状から別の分類が可能で、デフォルト (基本となる形状) があるか否かに大別できる。デフォルトがある文字の例として、エチオピア文字のように Cn の形状を基準にし、例えば ki は ka を、ti は ta を変形させたものになっている。ブラー

さて、日本語の漢字は1文字で複数の言語的単位を表記するケースと言えるが、逆に複数の文字で1つの言語的単位を表記するケースはどう解釈すべきだろうか。たとえば、アッカド文字にはVタイプ、CVタイプ、VCタイプ、CVCタイプの音節文字がある。アッカド語にはたしかにVタイプ、CVタイプ、VCタイプ、CVCタイプの音節が存在する。ところが、lu-ú /lū/ 「(希求・強調を示す小辞)」の下線部(語末のVタイプの文字)やša-ar-ru = /šarru/ 「王が」の下線部(CVタイプ文字に後続するVCタイプの文字)は音節の一部を表記するだけで、文字=音節ではない²⁵。ミノア線文字Bも一般に音節文字と分類されるが、CV文字によって子音連続を表記する必要上、CV-CVという文字列はしばしば/CCV/という音節に対応する²⁶。これらに対してR. Sproatは「core syllabic」という分類をたてる²⁷。核となる音節(ミノア線文字Bの場合ならCVタイプの音節)を表記する文字を備え、それ以外の音節は備えられた文字を組み合わせて便宜的に表記する文字体系という意味であるが、この見方には問題点もある。彼が「syllabic」と「core syllabic」を分けたのは、ある言語の全音素を表記する記号を備えた文字体系をアルファベットと呼ぶ以上、ある言語の全音節を表記する文字を備えた文字体系のみを「syllabic」と呼ぶべきだと考えたためである。ところが、多くのアルファベットはある言語の全音素を表記するだけの文字を備えていない。たとえば、26のラテン文字だけでは英語の全音素を表することはできない。そのため、英語ではいくつかの文字を組み合わせるにより26の文字では表記できない音素を書き表している(e.g. sh = /ʃ/, th = /θ/) ²⁸。したがって、「syllabic」と「core syllabic」を分ける根拠は薄弱と言える。むしろ、1つ以上の文字列が字句を成し、

フミー文字などもこれに属する。一方、デフォルトのない文字の例としては、それぞれが独立した形状であるひらがな・カタカナ(例えば、キはカから作られた訳ではない)や字素複合型のハングルがある。こういった下位分類の詳細な検討は今後の課題である。

²⁵ アッカド文字において、CV-VCという組み合わせとCVCタイプの文字とは自由変異の関係にある。すなわち、対応する文字が存在しないCVC音節に対してだけでなく、対応するCVC文字があってもCV-VCという組み合わせを用いることが可能であり、その場合、どちらを使うかは自由である。同一文書中で両方(e.g. liq と li-iq)が使われることも珍しくない。

²⁶ たとえば、ki-ti-me-na と書いて ktimena 「私有地」と読む。詳しくは、河野他(2001:995)参照。

²⁷ Sproat(2000:139-140)参照。

²⁸ この問題点にはSproat自身も気付いている。Sproat(2000:140, n. 2)参照。

字句が音素を表記していると考えてはどうだろうか。上の例では、sh, th という字句がそれぞれ /ʃ/, /θ/ という音素を表記していることになる。これにならって、アッカド文字とミノア線文字Bの例についても ša-ar, ki-ti という字句がそれぞれ /sar/, /kti/ という音節を表記しているという解釈を提案したい²⁹。

ここまでの検討で、文字で音節を記す際には、字節を基本とするものと字句を基本とするものがあることが確認できた³⁰。しかし、文字が音節と厳密な意味で一致する必要はないという点をふまえ、本稿における音節文字という呼称は子音・母音が入り混じった字節、すなわち字節で CV や CVC があらわせるものが文字体系の中に存在する場合に用いる。また、本稿では、字句は表記の問題とみなし、文字の類型は字節に対してたてることにする。

3.3 「アルファベット」の問題点

狭義のアルファベットが子音と母音を含むすべての単音を表記するのに対し、子音のみを表記する「アルファベット」も存在することが知られている³¹。後者は子音文字 (consonantary) ないしはアブジャド (abjad³²) と呼ばれる。子音文字は母音字のない単音文字体系 (segmental system) とみなされることが多いが³³、両者のちがいは単に母音字を欠くという量的

²⁹ これに従うと、かなの「しゃ」(2字節で1音節、あるいは1モーラ)も1字句とみなされる。樺島(1977:27ff.)では、「それ以上に細分すると、音列との対応がくずれる最小の文字列を表記要素とよぶ」と記されており、ここでの字句は表記要素に相当する。表記要素は言語や文字によって字素にも字節にも字句にも対応する。ただし、それは言語の表記における表音機能の問題であるため、文字論的に詳細な検討を加えるべき課題だと考えられる。

³⁰ 他に契丹小字やマヤ文字のように字素で音節をあらわす文字もある。

³¹ Gelb(1963:76ff.)はこれが母音を特定しない音節文字だと主張したが、定説となるには至らなかった。これは、すべての文字は表語文字から音節文字を経てアルファベットへと進歩するという仮説 (the principle of unidirectional development、詳しくはGelb(1963:200ff.)参照)に子音文字を無理やり押しこんだために生まれた主張であり、さまざまな批判にさらされてきた。Daniels and Bright(1996:8)参照。

³² 「アルファベット」が最古の単音文字であるギリシア文字の最初の二文字(アルファ、ベータ)にもとづく造語であるのに対し、「アブジャド」は子音文字の代表とも言えるアラビア文字にもとづく造語である。アラビア文字のもとの配列における最初の四文字(ア、フ、バ、ジーム、ダール)の音価(ʔ, b, ɣ, d)に母音 a を適宜補ってある。詳しくは、Daniels and Bright(1996:4)参照。

³³ たとえば、Sampson(1985:82)は子音文字を「a segmental script which ignores vowel segments」と定義する。子音文字がときに「defective alphabets」(例えば、Coulmouss(1996:91,

なものにとどまらない。すべての単音を書き記すアルファベットが基本的に表音をめざす³⁴文字であるのに対し、子音文字はそうではない。たとえば、ヘブライ語碑文に現れる brktk³⁵の母音は正確には分からないが、brkが「祝福する」という意の語根と、tが「私が」という接辞、kが「あなたを」という接辞を表しているため、全体として「私はあなたを祝福する」を意味することが分かる。多くの単語が3子音からなる語根をもとに構成されるセム語において、子音文字は主として語根や接辞等の形態論的単位を書き記すのに使われ、表音は本来その二次的な用途であったと思われる³⁶。したがって、本稿では狭義のアルファベットを単音文字と呼び、それとは質的に異なる類型として子音文字をたてることにする。

3.4 その他の問題点

まず、図1には第3の表音文字として featural という分類がたててある。Sampson はハングルが単音要素に分解でき、これをさらに(少なくとも部分的に)閉鎖音、濃音、激音といった音韻素性を示す要素にまで分解可能だという点に注目してこの分類をたてている³⁷。しかし、素性を示す成分らしきものはたしかに存在するものの、その適用範囲が限られており体系性を欠くため、Sampson の分類は極論と言わざるをえない³⁸。ハングルが組織的に分解できるのは単音要素までにとどまる。ただし、単音要素は単独で用いることはできず、音節ごとに組み合わせはじめて、文字として機能する³⁹。したがって、ハングルは単音文字ではなく、単音を表す拘束的要素によって構成される音節文字とみなすのが妥当と思われる。本稿では、この拘束的要素を字素、1つ以上の字素によって構成される1文字を字節と呼ぶことにする。この用語法で言い換えると、ハングルは単音字素

2003:113f.) 参照) と呼ばれるのも、同様の見方を反映している。

³⁴あくまでめざしているだけで、現実には全ての単音を表記できているわけではない。例えば、ウイグル式蒙古文字における語中の a, e は同じ形状の文字で表すなど。

³⁵Arad 16:2-3.

³⁶子音文字の末裔の中には子音で母音を補助表記したり (mater lectionis)、母音記号を考案したりして、表音機能を強化する方向に向かった文字体系も少なくない。

³⁷Sampson (1985:120-144)

³⁸同じ見解は DeFrancis (1989:186-200)、Sprout (2000:135-138) にも見られる。また、他の例としてかなの濁点がある。濁点を [+voiced] として全てのかなに一様に適用できない点からも素性表示でないことは確認できる。

³⁹河野他 (2001:761)。

からなる字節をもつ音節文字体系ということになる⁴⁰。

次に、上でたてた類型の中の2つ以上を含む文字体系もまれに存在する。たとえば、ウガリト文字には27の子音文字のほかに3つの音節文字(/ʾa/, /i/, /u/)がある⁴¹。また、コプト文字には29-30の単音文字のほかに音節文字が1つ(ti)含まれる⁴²。さらに、古代ペルシア文字では、単音文字、音節文字、表語文字の3種が併用される。いずれの場合も機能負担率がどれか1つに傾いているものの、複数の類型が併用されている事実を無視することはできない。そこで、このような場合、併用される類型を機能負担率が高い順に「・」で区切って列挙することにしたい。したがって、ウガリト文字は子音・音節型、コプト文字は単音・音節型、古代ペルシア文字は単音・音節・表語音節文字と分類されることになる。

最後に、シュメール系文字やエジプト系文字には上で述べたいずれの分類にも属さない文字が存在する。それは限定符(ないしは決定詞, determinative)と呼ばれる文字である。限定符は後続ないしは先行する文字列がたとえば神なのか人なのか国なのか草なのかを分類するだけで、具体的な語や音をいっさい表さないため、表語文字でも表音文字でもない⁴³。あえて分類するなら、図1のSemasiographicに相当する文字と言えるかもしれない。限定符は独立の文字だが、限定符のみを単独で用いることはできない。したがって、限定符は後続ないしは先行する文字列とともにひとつの字句を形成する拘束字節ということが出来る⁴⁴。限定符のみによって構成される文字体系はありえないため、表語文字の扱いと同じく、表音文字の下位区分として限定○○文字ないし○○限定文字をたて、「限定」の

⁴⁰ ちなみに、この字素・字節という単位を漢字にあてはめることも不可能ではない。たとえば、「説文解字」に収録された9353字の8割にあたる形声文字は意符と音符という2つの字素によって構成される字節とみなすことが可能である。また、会意文字は2つの意符からなる字節とみることが出来る。ただし、漢字のすべてが「六書」で截然と分けられるわけではなく、境界があいまいなところもあるため、本稿ではこの問題にこれ以上立ち入らないことにする。

⁴¹ 河野他(2001:127-136)参照。

⁴² 河野他(2001:436-440)参照。単音文字の数の違いは方言による。

⁴³ 形声文字の意符の中には草冠や木偏のように具体的な語や音を表さずに分類だけをおこなう役目を果たすものがある。これらは限定符的字素とみなすことができよう。

⁴⁴ 限定符は一定の音価を持たないが、例えば語末固定アクセントにみられる境界表示機能に類するものがあるとも考えられる。文字と音とが対応する場合を積極的表音機能とするなら、限定符は消極的表音機能と呼び、表音機能を認めていいかもしれない。詳細な文字論的検討は、今後の課題である。

位置は文字数および使用頻度に応じて決めることにする⁴⁵。

3.5 本稿でたてる類型

本節では、表意文字、音節文字、アルファベットという文字の三分法の問題点を論じながら、字素、字節、字句という単位を設定し、字節に対して以下の類型と下位分類をたてるにいたった。厳密には音節字節型、子音字節型等の呼称が望ましいが⁴⁶、ここでは音節型、子音型と略称することにする。また、例えば音節表語型と子音表語型を併用している併用型の場合、機能負担率が高い順に「・」で区切って列記する。その際、厳密に言えば、子音表語字節・音節表語字節型となるが、ここでは子音・音節型といった略称を用いる。

類型	下位分類	例
音節型	音節型	ひらがな、カタカナ、ハングル、 ブラーフミー文字など
	音節表語限定型	アッカド文字、ヒッタイト文字など
	表語音節型	漢字など
	表語音節限定型	シュメール文字など
子音型 ⁴⁷	子音型	フェニキア文字、ヘブライ文字など
	表語限定子音型	エジプト文字など
単音型 ⁴⁸	単音型	ギリシア文字、ラテン語式ラテン文字、 英語式ラテン系文字、 フランス語式ラテン系文字など
併用型	単音・音節・ 表語音節型	古代ベルシア文字 ⁴⁹
	子音・音節型	ウガリト文字
	単音・音節型	コプト文字

図4: 本稿でたてる類型

⁴⁵ 筆者らが知るかぎり限定符があって表語文字のない文字体系は存在しない。

⁴⁶ より厳密には、たとえばハングルならば単音字素音節字節型となる。

4 文字の系統

文字の系統は字形(文字の形状)と音価の比較にもとづいて判断される。字形に何らかの類似点がなければ言うまでもないが、字形が似通っていても音価が対応しない場合はやはり同系とみなすことはできない。たとえば、エジプト文字と原シナイ文字をくらべると似通った字形を持つ文字が少なくない。しかし、似通った字形を持つ文字の音価が対応しないため、原シナイ文字がエジプト文字の感化⁵⁰を受けた可能性は高いが、両者の間に系統関係をみとめることはできない。

それに対して、原シナイ文字から派生した古代南アラビア文字とフェニキア文字、およびその末裔⁵¹の系統ははっきり立証されている。したがって、フェニキア文字なら「原シナイ-フェニキア系文字」という形式で系統を示すことができる。また、「原シナイ-フェニキア-アラム-シリア-ウイグル系文字」というようにハイフンでつなぐことによって変遷を示すことも可能である。

複数の流れをくむ文字の場合、それらを「・」で区切って併置することにした。たとえば、ギリシア文字とエジプト文字の両方の流れをくむコプト文字は「ギリシア・エジプト-コプト系文字」となる。

ただし、文字の系統は常に明らかとは限らない。また、漢字とひらが

⁴⁷ 子音型の中には表語子音型の文字体系があってもおかしくないが、実例が見当たらないので便宜的に省略した。

⁴⁸ 単音型の中には単音表語型以外の文字体系があってもおかしくないが、実例が見当たらないので便宜的に省略した。

⁴⁹ 本稿では、D.D. Testen の解釈 (Daniels and Bright (1996:134f.)) に従った。複雑な文字体系をもつのは、アラム文字とアッカド文字の両者から感化を受けたためであると思われる。なお、河野他 (2001:421-426) によれば、古代ペルシア文字の単音文字は音節文字とも解釈できる。その場合、0a-i /0i/や ya-u /yu/ (Testen は 0-i /0i/や y-u /yu/ と解釈) といった表記の解釈が問題となるが、2 字節で 1 音節を表記する 1 字句とみなすことによって解決することも可能であろう。

⁵⁰ 文字の記号表現と記号内容をセットで取り込んだ場合は借用、部分的に取り込んだり文字体系や形状に関する発想のみ取り込んだりした場合は感化とする。

⁵¹ 古代南アラビア文字の末裔にはエチオピア文字がある。フェニキア文字の末裔はアラム文字とギリシア文字の 2 系統があり、前者からはアラビア文字やシリア文字が、後者からはラテン文字が派生している。シリア文字からはさらにウイグル文字が分かれ出ている。詳しくは、河野他 (2001:547-548) 参照。ちなみに、古代南アラビア語 (子音文字) からエチオピア文字 (音節文字) が、またフェニキア文字 (子音文字) からギリシア文字 (単音文字) が派生していることから分かるように、文字の系統と類型は直結しない。言い換えれば、類型は文字の系統を決める上で決定的な証拠とはならない。

な・カタカナ、あるいはフェニキア文字とブラーフミー文字のように同系とみなすべきかどうか微妙なケースも少なくない。そのため、文字の系統は必要に応じて参考までに表示するにとどめるべきであろう。

5 文字の分類案

以上の考察をふまえた上で、現時点で提唱する文字の分類案は以下のようになる。

<通称>○○(文字) = ○○語式○○型(○○ー)○○系文字

ここでは、共時的な分類案を提示していく形をとるため、「系」における(○○ー)は通時的変遷を示すものであるため任意表示とする。この分類案を具体的な文字体系に適用すると次のようになる。

(日本語の)漢字 日本語式表語音節型漢字系文字

ひらがな 日本語式音節型ひらがな系文字

カタカナ 日本語式音節型カタカナ系文字

(日本語の)ローマ字 日本語式単音型(原シナイーフェニキアーギリシアー)
ラテン系文字

(日本語の)点字 日本語式音節型点字系文字⁵²

(フランス語の)点字 フランス語式単音型点字系文字

ハングル 朝鮮語式音節型ハングル系文字

(中国語の)漢字 中国語式表語音節型漢字系文字

ウイグル式蒙古文字 モンゴル語式単音型(原シナイーフェニキアーアラ
ムーシリアー)ウイグル系文字

キリル式蒙古文字 モンゴル語式単音・音節型キリル系文字

⁵²日本語の点字は、6点単位を1字節とした場合、厳密に言えば2字節以上の字句でなければ文字として成立しないもの(例えば、ガ・ヴァ・ティなど)もある。従って、いわゆる50音に対応した基本的な文字に対する分類呼称となる。

契丹大字⁵³ 契丹語式表語音節型契丹大字系文字

契丹小字 契丹語式表語音節型契丹小字系文字

(ウイグル語の) ブラーフミー文字 ウイグル語式音節型ブラーフミー文字系文字

(アラビア語の) アラビア文字 アラビア語式子音型 (原シナイーフエニキア-アラム-ナバテア-) アラビア系文字

(トルコ語の) アラビア文字 トルコ語式子音型アラビア系文字

(ロシア語の) キリル文字 ロシア語式単音・音節型キリル系文字

(ウズベキ語の) キリル文字 ウズベキ語式単音・音節型キリル系文字

(ラテン語の) ラテン文字 ラテン語式単音型ラテン系文字

現代トルコ語の文字 トルコ語式単音型ラテン系文字

(ウズベキ語の) ラテン文字 ウズベキ語式単音型ラテン系文字

(英語の) ラテン文字 英語式単音型ラテン系文字

(フランス語の) ラテン文字 フランス語式単音型ラテン系文字

シュメール文字 シュメール語式表語音節限定型シュメール系文字

アッカド文字 アッカド語式音節表語限定型シュメール系文字

ヒッタイト文字 ヒッタイト語式音節表語限定型シュメール系文字

ヒエログリフ エジプト語式表語限定子音型エジプト系文字聖刻書体⁵⁴

ヒエラティック エジプト語式表語限定子音型エジプト系文字神官書体

デモティック エジプト語式表語限定子音型エジプト系文字民衆書体

⁵³ 契丹大字と契丹小字は、「字節」で考えれば、両者は同じ類型になる。「型」の詳細を示すれば、前者は「表語音節字節型」、後者は「音節字素表語音節字節型」となる。

⁵⁴ 文字体系全体を覆う、ゴチック体、明朝体、活字体、筆記体、草書体などのスタイルを書体という。権島(1977:35) 参照。

ウガリト文字 ウガリト語式子音・音節型ウガリト系文字

コプト文字 コプト語式単音・音節型(ギリシア・エジプト)コプト系文字

古代ペルシア文字 ペルシア語式単音・音節・表語音節型古代ペルシア系文字

フェニキア文字 フェニキア語式子音型(原シナイ)フェニキア系文字

ヘブライ文字 ヘブライ語式子音型(原シナイ)フェニキア系文字
ヘブライ語式子音型(原シナイフェニキア)アラム系文字

アラム文字 アラム語式子音型(原シナイフェニキア)アラム系文字

ミノア線文字B ギリシア語式音節型ミノア系文字⁵⁵

シリア文字 シリア語式子音型(原シナイフェニキアアラム)シリア系文字
エストランゲロ書体

シリア語式子音型シリア系文字セルト書体

シリア語式子音型シリア系文字ネストリウス書体

エチオピア文字 エチオピア語式音節型(原シナイ古代南アラビア)エチオピア系文字

ギリシア文字 ギリシア語式単音型(原シナイフェニキア)ギリシア系文字

マヤ文字 マヤ語式表語音節型マヤ系文字

⁵⁵河野他(2001:989-998)によると、線文字Bには「表意文字」があり、その総数は音節文字より多いが、周辺の・補助的な役割を果たすに過ぎないという。本稿での分類に従えば、音価がない(その文字を読まない)と解釈できれば限定、音価がある(その文字も読む)と解釈できれば表語音節となるが、不明な点も多いため、ここでは「表意文字」は呼称に含めず、単に音節型と分類した。今後のミノア線文字Bの研究の進展が待たれる。

6 結語

一般文字学の構築に向けての第一歩となる文字の分類案を示してきた。各言語および各文字における個別の問題よりも一般則を重視した分類案を提唱しているが、筆者らの知りうる範囲での文字しか扱っていないため、不備な点もまだまだみられると思われる。しかし、字節に対し一定の分類基準を設けようという試み自体が否定されるものではないと確信しており、比較的広域の文字を扱って5節に記した分類案を提唱できたことは本研究の最大の成果といえる。第一段階となるこの基準に詳細な検討を加えていけば、例えば契丹小字とマヤ文字が同じ「音節字素表語音節字節型」になるといったように系統論的に全く関係がないと思われる文字間の共通性が明らかになり、文字の類型論的検討が進められると考えられる。今後様々な文字に適用していきながら、問題点・改訂案を模索していきたい。

【参考文献】

- Coulmou, F. (1996) *The Blackwell Encyclopedia of Writing Systems*, Oxford: Blackwell.
- , —. (2003) *Writing Systems: An Introduction to Their Linguistic Analysis*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Daniels, P.T. and W. Bright eds. (1996) *The World's Writing Systems*, New York: Oxford University Press.
- DeFrancis, J. (1989) *Visible Speech: The Diverse Oneness of Writing Systems*, Honolulu: University of Hawaii Press.
- 福盛 貴弘 (近刊予定) 「ウイグル文クトルグ文書における印章の解説案」『岡山大学言語学論叢』10.
- Gabain, A. von (1954) *Türkische Turfan-Texte VIII*. Berlin: Akademie-Verlag.
- , —. (1974) *Altürkische Grammatik*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- Gelb, I. J. (1963) *A Study of Writing*, Rev. ed., Chicago: University of Chicago Press.
- 樺島 忠夫 (1977) 「文字の体系と構造」『文字』岩波講座日本語 8. 23-60. 岩波書店

- 河野 六郎(1977)「文字の本質」『文字』岩波講座日本語8. 1-22. 岩波書店
- 河野 六郎・千野 栄一・西田 龍雄 編(2001)『言語学大辞典 別巻 世界文字辞典』三省堂
- 西田 龍雄(1981)『世界の文字』講座言語第5巻. 大修館書店
- 一, 一. (1986)『言語学を学ぶ人のために』世界思想社
- Sampson, G. (1985) *Writing Systems*, Stanford, CA: Stanford University Press.
- Sproat, R. (2000) *A Computational Theory of Writing Systems*, Cambridge: Cambridge University Press.

A Classification of Writing Systems — A Step toward General Graphology —

Takahiro FUKUMORI & Jun IKEDA

This paper discusses various issues concerning the nomenclature and typology of the world's writing systems, and proposes a new system of classifying writing systems based on the language they convey, the linguistic unit(s) they represent (i.e. words, syllables, consonants, segments, and semantic classes), their graphic shapes, and, if evident, their genealogy. We thus classify writing systems in the following format:

language-*shiki* unit-*gata* (genealogy-)shape-*kei* writing.

If two or more types of unit are represented by the same set of graphs, we order them according to the number of graphs used to represent each of them as well as their functional load. If a writing system contains two or more separate sets of graphs for different types of linguistic unit, we separate them by a slash. As we accept the view that “*all* writing systems probably have some degree of logography” (Sproat 2000: 142), we abbreviate “X-logographic” simply as “X” (X here stands for “syllabic,” “consonantal,” and/or “segmental”). Note also that we classify *jisetsu* (“graph,” the smallest free graphic unit) rather than *jiso* (“grapheme,” the smallest free or bound graphic unit) and *jiku* (“polygraph,” a cluster of *jisetsu* which represents a single linguistic unit).

Some examples of our classification:

Japanese Kanji: Japanese-*shiki* logographic-syllabic-*gata* Kanji-*kei* writing

Hiragana: Japanese-*shiki* syllabic-*gata* Hiragana-*kei* writing

Han’gŭl: Korean-*shiki* syllabic-*gata* Han’gŭl-*kei* writing

Turkish alphabet: Turkish-*shiki* segmental-*gata* (Proto-Sinaitic-Phoenician-Greek-) Latin-*kei* writing

Mongolian writing: Mongolian-*shiki* segmental-*gata* (Proto-Sinaitic-Phoenician-Aramaic- Syriac-) Uyghur-*kei* writing

Akkadian cuneiform: Akkadian-*shiki* syllabic-logographic-determinative-*gata* Sumerian-*kei* writing

Ugaritic script: Ugaritic-*shiki* consonantal/syllabic-*gata* Ugaritic-*kei* writing

Phoenician script: Phoenician-*shiki* consonantal-*gata* (Proto-Sinaitic-) Phoenician-*kei* writing

This system, albeit tentative, provides any writing system in the world with a nomenclature which designates its essential traits.

ICG01649@nifty.com (Fukumori)

junikeda@lingua.tsukuba.ac.jp (Ikeda)